第 16 回
「北方領土と私たち」作文コンクール

入　賞　作　文　集

（教育実践推進校の公開授業　京丹波町立瑞穂中学校）

北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議

目　次

		頁
1	発刊にあたって	1
2	実施要項	3
3	入賞作文の選考について	4
4	入賞者一覧	5
5	授賞式風景	7
6	歴代最優秀賞受賞者一覧	8
7	京都府北方領土教育者会議について	9
8	京都府北方領土教育者会議の取組状況	10
9	入賞作文	11

○最優秀賞

京都府知事賞	南丹市立殿田中学校	加　藤　由　奈
京都市長賞	京都市立下京中学校	田　中　珠　生

○優秀賞

京都府教育委員会教育長賞	南丹市立園部中学校	久保田　美　優
京都市教育長賞	京都市立嵯峨中学校	出　野　華　香
北方領土問題対策協会理事長賞	南丹市立殿田中学校	吉　田　心々寧
北方領土問題対策協会理事長賞	京都市立嵯峨中学校	谷　口　澄　空
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	亀岡市立亀岡川東学園	岸　本　まりな
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京都市立久世中学校	川　下　桃　果
京都新聞賞	南丹市立園部中学校	八　木　梓緒音
京都新聞賞	京都市立下京中学校	西　村　柚　菜
ＫＢＳ京都賞	京都府立朱雀高等学校	東　郷　　叶
ＫＢＳ京都賞	京都市立下京中学校	立　石　さくら

○佳　作

京都府立福知山高等学校附属中学校	佐　伯　妙　子
南丹市立八木中学校	松　本　明寿香
京都府立海洋高等学校	松　本　若　菜
宮津市立宮津中学校	岡　本　優莉奈
綾部市立八田中学校	山　室　みなみ
京都市立東山泉小中学校	酒　井　美羽朱
京都市立大原野中学校	馬　場　菫　花
京都市立洛南中学校	松　岡　珠　蘭
京都市立嵯峨中学校	安　藤　壮　太
京都市立下京中学校	金　子　莉衣沙

発刊にあたって

「北方領土と私たち」作文コンクールも今回で十六回を迎えることができました。この間、多くの生徒の皆さんや先生方、また関係者の皆様に深いご理解と温かいご支援をいただきましたこと、心から厚くお礼申し上げます。

さて、昨年度に引き続くコロナ禍の中、「北方四島交流事業」（いわゆるビザなし交流）の実施が困難であると判断されるなど、北方領土問題の解決に向けた様々な取組が縮小・中止となりました。ただ、延期されていました東京オリンピック・パラリンピックが開催されるなど、ウィズコロナ時代としての社会や生活の新しい在り方が模索されている中で、一日も早く北方領土返還の実現をめざす運動においても停滞しないないように、知恵を出し合うことが求められています。

しかしながら、前年六月には、「ロシア軍は二十三日から北方領土の択捉島や国後島などで大規模な軍事演習を開始した。」という情報に対して、日本政府は「ロシア大使館に対し、北方領土における日本の立場と相いれないとして抗議した。」というニュースを聞き、きびしい現状を認識するとともに日露両国の壁を感じました。

この壁を越えるためにも、次代を担う若者にこの問題を自分のこととして考えてもらい、力強く発信してもらうことは必要です。そのひとつの場となっているのが、「北方領土と私たち」作文コンクールだと自負しております。そして、今回応募された各作品には、生徒たちの熱い思いが込められており、私たち大人は気持ちを新たにして応えていくべきだとも考えます。

この北方領土問題は国と国との問題ではありますが、多くの生徒たちが作文でも述べているように、私たちが「国民一人一人の問題」「自分ごと」と捉えて、自分の考えをしっかりもつことが問題解決の基盤となることは間違いありません。これが、国民の世論を形成し、政府を後押しすることにつながるのではないでしょうか。

この冊子に掲載されているように、多くの中学生・高校生たちが社会情勢を見据えて前向きな主張をしており、その輪がさらに広がれば、これほど心強いことはありません。

今回、京都府知事賞を受賞された加藤由奈さんの作品は、広島の平和祈念式典での「平和の尊さや大切さを、世界中の人々や次の世代に伝えなければならない」という言葉に出会い、同じころに起こったソ連による北方領土の不法占拠で、故郷を失った元島民に思いを馳せたものです。その中で、現在四島に住むロシア人に責任はないことに気づいたことも書かれ、まとめでは、北方領土問題を「学び、考えて、語りつなぐ」ことの大切さを訴えています。

また、京都市長賞を受賞された田中珠生さんの作品は、弟の北方領土問題についての質問から、この問題に関しての認識不足を知り、自主的に調べていく中で、「ふるさと」をキーワードに中学生らしい感性で素直に書いてくれたものです。結末には、平和的な解決を望みながら、「知る人が増えれば問題の解決は進むはずだ」とまとめています。

ところで冒頭で述べましたように、この作文コンクール

は第十六回を迎え、府内の各中学校、高等学校に一定認知されることにはなりましたが、若い世代の関心や理解を一層拡充するためには、府民会議と教育者会議の連携がより重要となってきます。関係の皆様には一層のご理解、ご支援をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

結びにあたり、応募していただいた生徒の皆さんやご指導いただいた各校の先生方に感謝申し上げますとともに、ご後援いただきました京都府、京都市、京都府・京都市教育委員会、京都府・京都市中学校長会、京都府公立高等学校長会、京都府市町村教育委員会連合会、京都府私立中学高等学校連合会、独立行政法人北方領土問題対策協会、京都新聞、産経新聞京都総局、ＫＢＳ京都の皆様をはじめ、関係の皆様方に厚くお礼申し上げ、発刊の言葉とさせていただきます。

令和四年二月五日

北方領土返還要求京都府民会議
会　長　菅　谷　寛　志
京都府北方領土教育者会議
会　長　宮　田　　功

令和３年度
第16回「北方領土と私たち」作文コンクール実施要項

１　趣　旨　　京都の中学生や高校生が北方領土の現実に関心を向け、その歴史的な経過や国際法に照らして日本の固有の領土であることを正しく理解し、北方領土問題に対する関心を高めることを目的としてこの事業を実施する。

２　主　催　　北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議

３　後　援　　京都府・京都市・京都府教育委員会・京都市教育委員会
京都府中学校長会・京都市中学校長会・京都府公立高等学校長会
京都府市町村教育委員会連合会・京都府私立中学高等学校連合会
（独立行政法人）北方領土問題対策協会・京都新聞・産経新聞京都総局
ＫＢＳ京都

４　テーマ　　「北方領土と私たち」にかかわる内容であること（題名は自由）

５　募　集　（１）対　　象　　京都府内の中学校・高等学校に在学している者
（２）募集締切　　令和３年12月10日（金）
（３）作品規定　　原稿用紙（400字詰）３枚程度
（４）応 募 先　　京都府北方領土教育者会議事務局
〒629-1116　京都府船井郡京丹波町市場丸ケ野４
京丹波町立和知中学校内　野間宛　TEL 0771-84-1104

６　審　査　　主催者において選定した審査員により審査

７　表　彰　（１）賞の設定
最優秀賞　２点・京都府知事賞・京都市長賞　各１点
優 秀 賞　10点・京都府教育委員会教育長賞　１点
・京都市教育長賞　１点
・北方領土問題対策協会理事長賞　２点
・北方領土返還要求京都府民会議会長賞　２点
・京都新聞賞　２点
・ＫＢＳ京都賞　２点
佳作・入選　若干点

（２）表彰式
令和４年２月上旬
（北方領土返還要求京都府民大会会場にて表彰予定）

８　その他　・応募の際は別紙の応募一覧表を添えて下さい。
・最優秀賞・優秀賞・佳作の作文は作文集に掲載されます。
・上位入賞作文は「北方領土に関する全国スピーチコンテスト」に応募します。

問合せ先：京都府北方領土教育者会議（京丹波町立和知中学校内）野間
電話:0771-84-1104　FAX:0771-84-1174

入賞作文の選考について

１　応募の状況

応募校：２２校　　応募点数：１，７１５点

２　選考委員と選考基準

（１）選考委員会の構成

氏名	役職･所属等
宮田　　功	京都府北方領土教育者会議会長 （京都市教育委員会学校指導課統括首席指導主事）
平井　祐子	京都府北方領土教育者会議副会長 （南丹市教育委員会教育参事）
野間　慎吾	京都府北方領土教育者会議事務局長 （京丹波町立和知中学校教諭）
森　　茂昭	京都府北方領土教育者会議運営委員 （京都市総合教育センター首席指導主事）
松島　功一	京都府北方領土教育者会議運営委員 （京都市立嵯峨中学校教諭）
今河　慶昭	京都市立開睛小中学校教諭
田華　　茂	京都市立下京中学校教諭
中井　悠太	京都市立久世中学校教諭
小森　　誠	京都府北方領土教育者会議運営委員 （京丹波町教育委員会社会教育課社会教育指導員）
西田　三郎	京都府北方領土教育者会議顧問 （京丹波町教育委員会教育振興室長）
野村　啓介	北方領土返還要求京都府民会議事務局長
松浦　快仁	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長
土渕　　誠	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長

（２）選考基準

・北方領土について正しい認識や理解に基づき記述されているか。
　　（正しい認識・理解の視点）

・北方領土問題に関心を持ち、主体的な姿勢で学ぼうとしているか。
　　（主体的な態度・関心・意欲の視点）

・北方領土問題の解決に向けて自らができることを考え、取り組もうとしているか。
　　（将来への展望の視点）

・上記の視点を持ち、読み手に共感を与える内容であるか。
　　（啓発資料としての価値の視点）

３　選考の結果

・別紙の入賞者一覧のとおり

第16回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

応募校数：22校　　応募作品数：1,715点

氏　　名	学　校　名	学　年
最優秀賞（京都府知事賞）		
加　藤　由　奈	南丹市立殿田中学校	3　年
最優秀賞（京都市長賞）		
田　中　珠　生	京都市立下京中学校	2　年
優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）		
久保田　美　優	南丹市立園部中学校	2　年
優秀賞（京都市教育長賞）		
出　野　華　香	京都市立嵯峨中学校	1　年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
吉　田　心々寧	南丹市立殿田中学校	3　年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
谷　口　澄　空	京都市立嵯峨中学校	1　年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
岸　本　まりな	亀岡市立亀岡川東学園	8　年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
川　下　桃　果	京都市立久世中学校	2　年
優秀賞（京都新聞賞）		
八　木　梓緒音	南丹市立園部中学校	2　年
優秀賞（京都新聞賞）		
西　村　柚　菜	京都市立下京中学校	1　年
優秀賞（ＫＢＳ京都賞）		
東　郷　　叶	京都府立朱雀高等学校	3　年
優秀賞（ＫＢＳ京都賞）		
立　石　さくら	京都市立下京中学校	2　年

※　氏名等には原則として常用漢字を使用しています。

※　亀岡市立亀岡川東学園は９年制で表示しています。

第16回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

	氏　　名	学　校　名	学　年
佳作	佐　伯　妙　子	京都府立福知山高等学校附属中学校	2　年
	松　本　明 寿 香	南丹市立八木中学校	2　年
	松　本　若　菜	京都府立海洋高等学校	2　年
	岡　本　優 莉 奈	宮津市立宮津中学校	2　年
	山　室　み な み	綾部市立八田中学校	2　年
	酒　井　美 羽 朱	京都市立東山泉小中学校	9　年
	馬　場　菫　花	京都市立大原野中学校	3　年
	松　岡　珠　蘭	京都市立洛南中学校	3　年
	安　藤　壮　太	京都市立嵯峨中学校	2　年
	金　子　莉 衣 沙	京都市立下京中学校	1　年
入選	小　林　心　菜	宮津市立栗田中学校	1　年
	大　音　瑠　奈	京丹波町立瑞穂中学校	2　年
	山　内　　夢	京都府立須知高等学校	3　年
	小　森　愛　斗	京丹波町立蒲生野中学校	2　年
	宇　野　壮　汰	京丹波町立和知中学校	1　年
	殿　岡　咲　月	京都市立下京中学校	1　年
	山　下　穂　花	京都市立嵯峨中学校	3　年
	八　木　梨 珠 菜	京都市立洛南中学校	3　年
	植　村　あ や ね	京都市立久世中学校	3　年
	今　野　瑛　太	京都市立久世中学校	2　年

※　氏名等には原則として常用漢字を使用しています。

※　京都市立東山泉小中学校は９年制で表示しています。

最優秀賞などの授賞式

京都府知事賞・京都府教育委員会教育長賞の授賞式

令和４年１月12日　京都府庁

西脇隆俊京都府知事、橋本幸三京都府教育委員会教育長から賞状が授与されました。

京都市長賞・京都市教育長賞の授賞式

令和４年１月25日　京都市役所

門川大作京都市長、稲田新吾京都市教育長から賞状が授与されました。

※　授賞式は新型コロナウイルス感染症予防対策として、マスクを着用して行われました。

歴代最優秀賞受賞者一覧

第１回（平成18年度）～第16回（令和３年度）

	京都府知事賞	京都市長賞
1	長岡京市立長岡第二中学校 安川　愛佳	京都市立高雄中学校 寺島　千尋
2	京都府立洛北高等学校附属中学校 村上　　花	京都市立堀川高等学校 藤田　紫穂
3	京都府立園部高等学校 大森　しおり	京都市立松尾中学校 杉浦　由佳理
4	京都府立園部高等学校 奥村　麻衣	京都市立嵯峨中学校 木村　瑞季
5	亀岡市立東輝中学校 加藤　優生	京都市立嵯峨中学校 夘滝　由季
6	京都府立須知高等学校 星山　紗輝	京都市立伏見中学校 中西　ひなた
7	宮津市立栗田中学校 池永　佳菜子	京都市立伏見中学校 大澤　未希
8	大山崎町立大山崎中学校 淺野　陽香	京都市立伏見中学校 岡嶋　良太郎 ※全国スピーチコンテスト　〇奨励賞
9	京都府立鴨沂高等学校 石田　裕貴 ※全国スピーチコンテスト 〇北対協理事長賞　花阪　大輝 京都府立園部高等学校附属中学校	京都市立嵯峨中学校 田中　亜門
10	京都府立園部高等学校附属中学校 十倉　希望	京都市立嵯峨中学校 児玉　宜伸
11	南丹市立園部中学校 高屋　瞳華 ※全国スピーチコンテスト　〇審査員特別賞	京都市立嵯峨中学校 児玉　宜伸
12	南丹市立園部中学校 藤内　空菜 ※全国スピーチコンテスト　〇奨励賞	京都市立嵯峨中学校 宇佐美　智也
13	南丹市立園部中学校 日下部　理子	京都市立嵯峨中学校 鵜飼　瑠璃子
14	南丹市立園部中学校 米谷　カヤ ※全国スピーチコンテスト 〇審査員特別賞　上山　莉奈 南丹市立園部中学校	京都市立嵯峨中学校 鵜飼　瑠璃子
15	向日市立寺戸中学校 山下　青葉 ※全国スピーチコンテスト　〇奨励賞 ※全国スピーチコンテスト 〇北対協理事長賞　日下部　佳子 南丹市立園部中学校 〇奨励賞　河原　奈那 南丹市立園部中学校	京都市立嵯峨中学校 河合　玲奈
16	南丹市立殿田中学校 加藤　由奈	京都市立下京中学校 田中　珠生

京都府北方領土教育者会議について

1　設　　立　　平成 18 年３月

2　設立趣旨　　北方領土問題の解決のために次代を担う青少年が北方領土について関心を持ち、正しい理解を深めるために教育関係者の会を結成して諸活動を行う。

3　会　　員　　京都府内の中学校・高等学校教員等

4　主な取組　　○「北方領土と私たち」作文コンクールの実施（平成 18 年度～）
　・第 16 回作文コンクール（応募校 22 校　応募点数 1,715 点）
○北方領土教育実践推進校指定事業の実施
　・２校（活動支援経費 10 万円、授業公開、作文コンクールへの応募、教材研究等）
○各種研修会等への教員・生徒の派遣
　・四島交流事業（ビザなし交流）…国後島、色丹島、択捉島
　・現地視察研修会…根室市周辺
　・近畿ブロック研修会…近畿各府県
○北方領土に関する全国スピーチコンテストへの参加　等

5　組織体制　　会長（１）　副会長（１）　事務局長（１）　事務局次長（１）
運営委員（若干名）

京都府北方領土教育者会議の取組について

1　「北方領土と私たち」作文コンクールへの応募校数･応募作品数

第１回	２０校	４０４点
第２回	２５校	８９５点
第３回	３３校	１，９３８点
第４回	２０校	１，３０４点
第５回	２４校	１，９７９点
第６回	１５校	１，４８１点
第７回	１８校	１，４３０点
第８回	１８校	１，７４０点

第９回	１８校	１，５４５点
第10回	２２校	１，４７１点
第11回	１８校	１，３０２点
第12回	２４校	１，４４８点
第13回	２１校	１，５９１点
第14回	２１校	１，５１１点
第15回	２３校	１，４２９点
第16回	２２校	１，７１５点

2　各種研修会への参加状況　（参加者実績：教員数＋生徒数）

年度	北方四島交流	教育指導者研修（根室市）	視察研修（根室地域）	近畿ブロック研修会（６府県）
平24	国後３	2		17（滋賀）
25		2	28	43（京都）
26		2		22（大阪）
27	国後２、択捉１	2	20	18（兵庫）
28		2		9（奈良）
29		2		18（和歌山）
30	択捉１	2	20	14（滋賀）
令元		2		48（京都）
2	新型コロナウイルス感染症のため中止			
3	新型コロナウイルス感染症のため中止			4（兵庫）ｵﾝﾗｲﾝ

3　実践推進校事業指定校

年度	学校名
平成19	園部高校
	八条中学校
20	園部高校
	伏見中学校
21	園部高校
	大枝中学校
22	東輝中学校
	山科中学校
23	東輝中学校
	嵯峨中学校

年度	学校名
24	日置中学校
	西賀茂中学校
25	南桑中学校
	烏丸中学校
26	城北中学校
	中京中学校
27	和知中学校
	上京中学校
28	蒲生野中学校
	梅津中学校

年度	学校名
29	園部中学校
	北野中学校
30	殿田中学校
	桂川中学校
令和元	亀岡川東学園
	双ケ丘中学校
2	八木中学校
	開晴小中学校
3	瑞穂中学校
	久世中学校

入 賞 作 文

最優秀賞（京都府知事賞）

想いをつなぐ

南丹市立殿田中学校
三年　加藤　由奈

「私たちには使命があります。あの日、広島で起きた悲惨な出来事。そのことを知り、被爆者の方々の思いや願いを聞き、考え、平和の尊さや大切さを、世界中の人々や次の世代に伝えなければならないのです。」

これは、今年の夏、広島の平和祈念式典で述べられた小学生による「平和の誓い」だ。このことは、戦後、故郷に帰ることができないまま、七十六年以上も苦しみを負い続けた人々の想いをつなぐことにも重なるものだ。

学校の特別授業で北方領土問題について学んだ。漠然とその言葉は知っていたし、「日本の領土なのに、変だな。」と思っていた。でも、戦後自分たちの故郷に勝手に土足で入って来られたこと、故郷を占拠され住む場所を変えられたこと、荷物のように扱われ運ばれたこと、そして今も故郷に戻ることが叶っていないことを知った。ロシア人に敵意さえ覚えた。

でも、交流事業で国後島を訪問した人の話を聞いて新たなことがわかった。接したロシアの人は日本人に対して優しく、中には北方領土は日本に返した方がいいとまで言ってくれる人もいたそうだ。ロシアの人がみんな悪いわけではない。一人ひとりを見たら、ずいぶん違うんだと気づくことができた。

一方、日本国内に目を向けてみると、北方領土問題についての認知度が年々低下してきていることも知った。特に若い世代の関心の低さは大きな課題だ。このままでは、何も前進しないまま、やがて問題が忘れ去られてしまうだろう。

北方領土問題を解決するには、一人ひとりの意識を変える必要がある。学校で授業を受けて、その時は「北方領土問題」という言葉は頭に残っても、後から自分でその問題について調べたりして、自分事として捉え続けようとしている人は少ないだろう。日本は北方領土の他にも竹島や尖閣諸島など、領土に関する課題を抱えている。領土が他国の支配下に置かれたら、排他的経済水域で活動ができなくなり、資源供給の減少につながってしまうことになる。でもそれだけではない。今も故郷に帰ることができない人がいる。苦しんでいる人がいる。また、今、島にはロシアの人が住んでいる。その人たち自身には何の責任もない。

この問題をずっと忘れないために、私と同じ世代の仲間がもっと自分の事として考えることができるためにはどうしたらいいのだろう。それは、昔の出来事や人々の想いを知ることだと思う。歴史を学ぶ意義は戦争の悲惨さや特定の民族に対する差別など、同じ過ちを繰り返さないためだ。そして、人間同士が助け合うことによって生きてきたその意味を忘れないようにするためだ。

広島の平和の誓いでは、次のような言葉も述べられた。「本当の別れは会えなくなることではなく、忘れてしまうこと。私たちは、犠牲になられた方々を決して忘れてはいけないのです。」と。私たちの世代が自分事としてこの問題に向き合うということは、この問題を知り、学び、考え、当事者の思いに寄り添い、語り継いでいくことだ。私は、この問題を絶対に忘れない。次の世代にこの大切な歴史と想いをつなぐ。それが私の自分事としてできることだ。

最優秀賞（京都市長賞）

北方領土を知って

京都市立下京中学校
二年　田中　珠生

「北方領土の歴史って知ってる？」と弟に聞かれた私は、答えにつまってしまった。北方領土は返還されるべきものだということはわかっていたが、それ以上のことは何も知らなかったことに驚いた。日本固有の領土と主張し、四島を取り返したいと願う立場なら、もっと知っていて当然なのではないか。しかし、北方領土に関する歴史や今の状況を正しく答えられる人は、どのくらいいるだろうか。きっと多くはないと思う。七十年以上も北方領土の返還が叶わない理由の一つは、そこにあるはずだ。

ロシアの人はどうだろうかと思った私は、調べている中で、ビザなし交流の記事を見つけた。このビザなし交流とは、四島の現島民のロシア人がビザなしで日本に来ることと、日本にいる元島民や関係者などが、ビザなしで北方領土に訪れることだ。それぞれが、現在住んでいる人たちの文化に触れたり、意見を交換したりして、領土問題が解決に向かうことを目的としている。

記事にあった写真の様子からみると、お互いに楽しそうで、いい取組だと感じた。ところが、「ビザなし交流以前は、現島民のロシア人が日本の主張する北方領土問題について知らないということもあった。」という記事が目についた。ビザなし交流で、この状況は少し改善されたと思う。ただ、ここから推測してみれば、島民以外のロシア人は、日本の主張をどれぐらい知っているのだろうか。

日本人もロシア人も「知らない」ということは大きな問題だと思う。私は弟と一緒に北方領土のことを調べていたときに、弟は鋭い質問を投げかけてきた。それは、「もし日本に返還されたら、今、北方領土に住んでいる人はどうなるの？」というものだった。私は、これについては考えたこともなかった。調べてみると、北方領土には約一万八千人のロシア人が暮らしていて、そこで生まれ育った人もいることが分かった。今までは、四島は不当に占領されているという理解だけだったが、四島にはロシア人の生活が定着している一面あることを知って思うことがある。現在、北方領土を「ふるさと」と思う人たちがいるなら、もし返還されたときに「ふるさと」を奪われたと感じる人もいて、日本の元島民と同じようなことが生まれるだろう。しかし、「ふるさと」と思う人がいるということを両国民が分かり合えていたならば、何らかの解決策を取ることはできると思う。

元島民の悲しい体験について、もっと知ってもらうことが大切である。ロシア人の多くの人に、元島民が「ふるさと」を奪われるとき感じた怖さや怒り、帰れない悲しみを知ってもらえれば、領土返還も近づくのではないだろうか。正直に言うと、私自身もこの問題で知らないことが多かった。でも、知ることが増えていく中で、以前よりどんどん身近な問題と考えるようになっていった。

つまり、まずはお互いを知ることが大切なのだ。ビザなし交流の記事でもう一つ注目するものがあった。それは元島民の方が現地で交流したことで、もし返還されたら、今住んでいるロシア人と一緒に暮らしてもいいという意見を見つけたことだ。これは、大きな意味を含んでいると思う。国と国の戦争によっておこったことが、日本人やロシア人という隔たりをなくし、国という枠組みを超えて解決できたら、これこそが本当の終戦であり、平和の実現だと思う。だからこそ、まずは知ることから始めよう。

私は北方領土問題を知ることができた。北方領土を国や人種、昔の出来事と関係なしに誰もが仲良く暮らせるところにしたい。そのためにも知ったことを誰かに伝えていきたい。小さな一歩だけど、知る人が増えれば問題の解決は進むはずだ。このような行動が、いつかは北方領土を世界とつなぐことを信じて。

優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

ふるさとに思いを

南丹市立園部中学校
二年　久保田　美優

「ふるさと」。眺めているだけで心が落ち着く見慣れた景色。かけがえのない思い出を想起させる空気感。そこで過ごす時間は居心地がよくて、自然と笑顔がこぼれてくる。何物にも代え難い大切な場所。それが「ふるさと」だ。

「返せ、北方領土」。北海道の道東には、このような看板が目に留まる。私にとっての「ふるさと」は、北海道でも島に近い北海道釧路市だ。昨年の春、中学校入学と同時に京都府の学校に転校してきた。しかし、入学早々、新型コロナウイルス感染症に伴う臨時休校となり、新たな環境下での戸惑いや不安はさらに大きなものになった。学校に行くことが当たり前と考えていた私にとって、はじめての経験の連続だった。当たり前がいとも簡単に奪われてしまうことは、恐怖にも近い感覚だった。

先日、社会科の授業で北方領土について考える機会があった。実際に国後島と色丹島に行かれた先生方や、元島民の話を聞いた。日本固有の領土である北方領土。しかし、現在そこに住んでいるのはロシア人だ。かつて島に日本人が住んでいたことを物語るのはお墓ぐらいであるという。それなのに、そのお墓にすら自由にお参りをすることができない現状がある。境遇はまったく違うが、突然ふるさとを離れることになった寂しさや不安は、私にも想像できる。ましてや七十六年も帰ることができていないのだ。

私がそうであるように、ふるさとと言えば思い出す、北海道の海の色、潮の香りや鳥の声。そして、北海道にいた頃、実際に納沙布岬から見た手の届きそうな島。それなのに届かない、近くて遠いふるさと。それが北方領土だ。一方で、同じ景色をふるさとと思っている人たちがいる。今、島に住んでいるロシア人だ。北方領土は日本固有の領土だ。元島民の方々のことを思うと、正直、複雑な思いはある。しかし、この人たちから突然「当たり前」を奪うことは、やはりできないと思う。

京都は、よく考えてみると北方領土から遠く離れた地域だ。想像もできない地域のことだから、きっと他人事にしか考えてもらえないだろうと思っていた。でも違った。学校で学んだ時、この問題を同じ世代の仲間が真剣に受け止め、考えてくれたからだ。そのことがとても嬉しかった。関心が薄れていることが北方領土問題の最大の課題だと言われているが、それは私たち若者の努力でいくらでも変えていけると実感した。

だから私は、今感じているこの思いを率直に周囲の人たちに伝えていきたい。誰にとっても大切なふるさとに、誰もが自由に行き、誰もが安心して過ごすことができる。そんな当たり前をみんなで守っていこう。そんな社会を創るのは、私たちなのだと。ふるさと北方領土を守っていこうと。

優秀賞（京都市教育長賞）

笑顔のカギ

京都市立嵯峨中学校
一年　出野　華香

北方領土問題、この問題を解決するためには、一人一人が北方領土問題への意識を高め、自分の意見や思いを強く抱くことが、私は一番大切だと思います。

ロシア側からすれば、漁業が盛んで自然にあふれており、暮らしやすい場所だとは思うけれど、その土地を奪われた日本人、特に北方領土の元住民たちは、悲しみと自分たちのものなのに他国に奪い取られ、返してもらえない怒りであふれています。

自分の住んでいた家なのに他の人に家から追い出されて、追い出した人がその家で幸せに過ごす。普段では考えられないこのようなことが、北方領土では実際におこっていたのです。自分の生まれた故郷、自分が育った故郷に帰れず、以前の生活に戻れないのは苦しいことだと思います。これは先に書いた例だと、普通に自分の家で生活ができないということと同じです。

今の日本の人たちは、ほとんどの人が北方領土の近くには住んでおらず、元島民の人たちと会ったり話したりすることはありません。北方領土について興味を持ったり、深く考えたりすることは、あまりないと思います。これでいいと納得はできませんが、現状はこのようなものだと思っています。だからこそ、一人一人の意識を高め、みんなで解決しようとする日本人の姿勢が大切だと思います。

一人一人が意見を持つと、政府もより動き出すでしょう。ロシアと正式に領土問題について話し合い交渉することができるのは日本政府だけです。だから、私たち国民が動き出さないと、領土返還に関しての政府の動きを後押しすることはできないことになるのです。

すべての国民に、無理やり政府に対して意見を訴えていけばいいとは言いませんが、北方領土に住んでいた元島民の笑顔と喜びを少しでも早く取り戻すために、一人一人のほんの少しの努力が大切だと考えています。

自分自身にこの問題を当てはめてみたらどうなるかを考えてみました。私は京都に生まれました。魅力ある素敵な京都に生まれました。もし、京都が他国に奪い取られ、京都にはもう帰ることができない状況となったらと想像するだけでも、とても嫌な気分になってしまいます。

北方領土問題をできるだけ早く解決するためには、国民の行動、努力が欠かせません。さらに、北方領土が故郷となる元島民の人たちの笑顔が見られる日を願って、一人一人が協力することが必要であり、私には関係ないから、「どうでもいい」と思う人を少しでもなくしていかなければ、解決はさらに遠いものとなるでしょう。

北方領土問題の解決に協力してくれる人たちは、大切なカギを持っています。そのカギが多くの人に持たれることによって、きっと、そのカギは笑顔を取り戻してくれるでしょう。このカギは、あなたの思いで、いつでも手に入れることができます。

そのカギは、強い思いであふれているでしょう。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

私達の義務

南丹市立殿田中学校
三年　吉田　心々寧

「おかりなさい、ご苦労さま」、私達が普段当たり前に聞けるこの言葉。この言葉には安心できる魔法がかかっている。普段は何とも思わなかったこの言葉が、今はとても重く感じる。

北方領土問題は今、危機を迎えている。なぜなら「故郷に一度でいいから帰りたい」と願っている元島民の高齢化が進んでいるからである。私は、その中の一人である山本忠平さんのインタビューを見た。終戦時、十歳であった山本さんは、島の人達と一緒に貨物船に乗せられ、日本に送られたそうだ。貨物同様の扱いで水ももらうことができず、何人も亡くなった人がいたという。泣かない赤ちゃんを抱く母親。もう温かくならない身体をずっと抱いて何を思っていたのだろう。何日かして、「徳寿丸」という日本の船に乗り換えることができたそうだ。船に上がると赤十字が入った白い帽子の看護婦さんが「おかえりなさい、ご苦労さま」と温かい日本語で迎えてくださったそうだ。その日本語は、山本さんの心にどんなふうに届いたのだろう。

私が住んでいる町はとても温かい。小学生が下校するときには、町の人達が玄関先に出て「おかえり」と言ってくれる。いつかこの町を巣立っていったとしても、「故郷」と聞くと思い浮かべるのは、他愛もない家族との会話やこの町の優しい風景だろう。

一方で、今島に住んでいるロシア人にとっても、島がもう「故郷」になっているのだ。私はそのロシア人のことを悪いとか憎いとは思えない。同じように「故郷」を思う気持ちを持っていると思うからだ。誰も不幸にならず幸せになるには、一人ひとりの「故郷」を大切にする方法を、日本だけでなくロシアの人とも一緒に考えていくことだ。そのために私達ができることは、「北方領土問題に対する意見をインターネットで発信すること」だ。ロシアの人達とよい関係を築き、一緒に考えるためには、まず私達の意思表示が大切だ。そのためにも英語などの他国語を話せるようになり、ロシア人や世界中の人達とつながることが大切だ。またこの問題が解決されたとしても、平和主義を掲げる国として、北方領土問題を戦争の怖さを若い人達に語り継ぐことも大切だ。他の学校の同学年の人達に、私達が知ったことを伝えたり語り合ったりすることもできるだろう。

私が望むことは、北方領土問題がこの先ずっと語り継がれ、この問題によって失われた命が無駄にならないことである。そうすることができるのは、北方領土問題を抱えた日本で生きている私達だけなのだ。ロシア人も元島民の方々も「おかえり」「ただいま」と笑顔で自分達の故郷に帰っていく。そんな島に変えていけないだろうか。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

伝えよう。「当たり前」のこと

京都市立嵯峨中学校
一年　谷口　澄空

私は、現在北方領土に住んでいる人達に対して、どう目を向ければいいのかわかりませんでした。でも、それは珍しい考えではないと思います。

北方領土では、ロシアと日本が結んでいた「互いに攻撃しない」という内容の条約をロシアが破り、住んでいた日本人全員が強制退去させられました。そのことをきっかけに、現在もロシアに不法占拠されています。日本固有の領土で魚を取り、豊かな自然の中で暮らしていると思うと、正直怒りがわいてくるのは当然のことのはずです。なぜなら、日本人が住んでいるのにも関わらず、条約を破り、いきなり占領するなんて考えられないことだからです。

私は「日本が強引にでも取り戻せばいいのに」と以前までは思っていました。けれど、現在、その島に住んでいるロシア人にとって北方四島は大事な故郷だから、その考え方はやめようと思うようになりました。実際、自分の故郷である場所が「もとは私たちの領土だから。」といきなり押し入られたら、絶対不満を感じるし、その国を私は恨むはずです。その気持ちが大きくなり抑えきれなくなると、また何も悪くない一般の人を巻き込んだ醜い争いが起きてしまうと私は思います。

ただ、住んでいた場所を追い出された元島民の皆様の気持ちは、自分では想像しきれません。七十年以上前のことですが、これは過去のことではなく、私たちが授業を受けている時間、テレビを見ている時間、友達と話している時間も継続していることです。これを「昔に起こった出来事」で終わらせていてはいけないと心から思います。

また、ロシアの人たちも、私の「ロシアに日本の領土を奪われた。」という気持ちと同じように「日本がロシアの領土を奪おうとしている。」と思っているのかもしれないな、と考えました。平和的な解決法を出すのは難しいと思うけれど、互いに歩み寄り、国と国との溝を埋めて、これからも自国の利益にとらわれない交流を続けていくことで、明るい未来が待っていると私は信じています。ロシア政府もしっかりこの大きな問題に向き合うべきだと思います。

今、北方領土問題を通してわかることは、「約束は守る、大切なものを奪わない。」という当たり前のことです。それは国に関係なく、小さな子供も知っている、守らなければならない、いや守るのが当然のはずです。それが現状ではできていません。

だから私たちは声をあげましょう。京都から北方領土、その距離は千キロメートル以上離れているけれど、「日本」という一つの国として団結し、約一億三千万人の想いを精一杯伝えれば国境を越え、きっと届くはずです。「私には関係ない。」ではなくて、今世界に訴えなければならないのです。

「当たり前」のことを。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

自分だけでなく周りを見る

亀岡市立亀岡川東学園
八年　岸本　まりな

みなさんは、北方領土問題についてどう思いますか。今現在、北方領土はロシアに占拠され、多くのロシア人が暮らしています。私は正直、ロシアは法的根拠もなく北方領土を占領しているのであるなら、日本に返してほしいというふうに思っていました。もし私がもともと、その島に住んでいた住民だったら「なぜ、自分のふるさとが奪われなければならないの」と思っていたかもしれません。

しかし、私は社会の先生の発言をきいて思い直しました。「その島で生まれ育ったロシア人の子ども達にとっては、その島がその子達のふるさとだ」という先生の言葉で、北方領土は今、日本人だけのふるさとではなくなっていると気づかされました。そこで、北方領土を一方的に日本に返してもらうという案ではなく、北方領土を日本とロシアの二つの国の領土にすることが、両国にとって最善の案なのではないかと思うようになりました。

北方領土問題について調べていく中で、ロシア側の政府の人達は、北方領土である四島を日本に返還する様子がないことを知りました。また、日本側の政府の人達やロシア側の政府の人達が、お互いの国を訪問していますが、北方領土問題についての話もあまり進んでいないということも知りました。

そこで、私は冒頭で語った「北方領土を両国の領土にする」という案を思いつき、このことについて調べてみました。すると、世界的に知られるヨハン・ガルトゥングという博士が、これらの解決策として共同所有を提言されているということが分かりました。共同所有とは、主権を主張して争うのではなく、双方が主権をいったん放棄して「特別区」として共同管理することです。実際に、この方法で成功しているのがペルーとエクアドルの領土問題です。この両国は、アンデスの山の領土権を争って、五十四年もの間、戦争が続いていました。でも共同管理をすることで、この問題が解決したそうです。

この方法を利用することで、北方領土問題が解決するのはとても現実的ではないでしょうか。そうすれば、戦争をすることなく、安全に問題を解決させることができると思います。それだけでなく、共同所有なので日本人もロシア人もこの四島に住むことができます。すると、両国の領土とまではいきませんが、両国の四島として実現させることは可能ですし、それぞれのふるさとを守ることだって可能です。

もし、この方法が本当に実現すれば、今後両国の住民が快適に四島に住めるようにしていくことも大切になってくると思います。そのために、学校であれば日本とロシアの二つの学級または学校をつくり、両国の子ども達がしっかりと学習できる環境をつくっていくこと、お店であれば、それぞれの国の商品を売り出したりすることなどが必要になってくると思います。こうした両国の住民が快適に過ごせる施設を整備すれば、土地の問題以外にもたくさんの問題を解決することができます。また、観光の面から見ると、北方領土には自然がたくさんあるので、自然を生かした観光、例えば温泉施設などをつくり、旅行先として発展していけば島全体が盛り上がっていくと思います。

この北方領土問題について考えていく上で一番大切なのは、現在の住民や元島民を危険な目にあわせないこと、つまり戦争を起こさせないことです。それぞれの国の価値観が違ったり、行き違いを起こしたとしても、決して戦争は起こしてはいけません。今も内戦や紛争をしている国を安全な国にするためには、まず私達の問題を解決させ、次につなげていくことが必要です。次につなげることができれば、ふるさとを奪われる人々をなくし、四島全体や世界全体に笑顔が戻るでしょう。難しいかもしれませんが、一歩ずつ領土問題を解決させ、笑顔を増やしていってほしいです。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

故　郷

京都市立久世中学校
二年　川下　桃果

「『子どもを戸外に出さないよう』とソビエト軍が来る日、通達が出された。」そう語ったのは択捉島出身の鈴木咲子さんという元島民の女性だ。

戦後、穏やかな島の生活が戻りつつあった八月二十八日、予期せぬ出来事が起こった。突然ソビエト軍が侵攻してきたのだという。鈴木さんの村には九月半ばに来たが、それまでにさまざまな噂が広がった。中でも若い女性は連れて行かれるという話に、年ごろの女性は男性の服を着て髪を短く切ったり、丸刈りにしたりして暮らしていた。このとき、女性たちはどのような心境だったのだろう。不安と恐怖でいっぱいだったであろう。当時はジェンダーに対する偏見も現在よりもすごかった。そのため、男性のような姿で暮らすのはとても辛かっただろうと考えてしまう。

ソビエト軍が来た日は祖母と鈴木さんの二人だけが奥の部屋にいるように言われた。長い時間息をひそめていた。やがて聞こえてきたのは数頭の馬のひづめの音。恐ろしさのあまり喉がカラカラに乾いてしまう。そばにいる祖母に「ばばちゃん、おっかないね」という鈴木さんの手を、祖母は黙って強く握ってくれた。ある家では腕時計や万年筆等を略奪され、またある家では一時間以上も家を物色されるなど、ソビエト軍の横暴ぶりは目に余るほどだった。

昭和二十三年十月、強制送還の命令が出された。ソビエト側の荷物の検査で、指輪や時計、カメラ等は没収されたり、されなかったりと、検査するソビエト人によってまちまちであったが、紙に文字が書いてあるものは一切許されなかった。鈴木さんの村の村長は骨箱を一つだけ大切に胸に抱いて検査を通り抜けた。その骨箱のなかには村の戸籍簿の原本が忍ばせてあった。村長は村の人たちのために命をかけて最後の芝居を演じてくれたのだ。危険を顧みずに村人のため、勇気ある行動をとった村長は正しく村人の英雄であっただろう。

収容所での生活は悲惨なものだった。ドアもないトイレは深い便槽の中に何人もの子どもが落ち、引き上げられても助からない方が多かった。そう聞かされ、一人でトイレに行かないようにと親に言われた。食事は質素なもので、子どもたちは栄養失調に陥り、歩くこともままならなくなっていった。乳児の遺体を背負いながら乗船した母親もいたという。函館に上陸し子どもたちを入院させたが、手遅れで六人も七人も命を落とした。そしてその数は半年後、一年後とさらに増えていった。

この内容はインターネットで調べた内容であり、もちろん実際に見聞きしたことではない。しかし、私たちが普段から利用しているインターネットにこのような内容が書かれていることで、少しでも身近に感じ、北方領土問題について、より考える機会を得られる場であると感じる。辛い過去を語ってくれる人がいるからこそ、歴史が風化せずに人々に認識され続けるのだと改めて考えさせられる。北方領土の元住民の方々にとっての故郷は、今、帰ることのできない場所になっている。北方領土返還運動は疎かにしてはいけないと思う。しかし、現在では北方領土でも新しい命が生まれ、多くの人の故郷となっている。そのため、返還されることができたとしても、今の住民と共存して生活していく必要があると私は考える。

最後に、「領土解決の糸口さえも何故見出すことができないのか、返還運動の続く中でむなしさを覚える時がある。しかし、故郷の島に眠る先祖の霊。強制送還の最中、今の世の平和を知らずに亡くなった人々や、島の返還を心の支えとし、苦労を重ねた末、亡くなった人々のことを考えると、私たち残された者は、返還運動を疎かにしてはならないと、思いを新たにする。北方領土返還要求運動は私にとって供養の一つかもしれない。」と鈴木咲子さんは語っている。

優秀賞（京都新聞賞）

つなぐ先には何があるのだろうか

南丹市立園部中学校
二年　八木　梓緒音

一九四五年。終戦を迎えた日本の夏。

「やった！　今日はたくさんこんぶがとれたね！」。九歳の少年は嬉しそうに声をあげる。少年の家族は、歯舞群島の貝殻島で昆布漁により生計を立てていた。学校から帰り、大好きな砂浜に繰り出し、今日も大自然で思いっきり遊ぶ。いつもと変わらない日常。そんな日常は、ある日を境に奪われた。

「ソ連兵が来る」。そんな噂が島中で広まった。北海道の根室へ緊急避難する人も多くいた。しかし、少年と家族は、先祖からのふるさとに残ることにした。やがて、本当にソ連兵が次々と島に上陸。ソ連兵は体格も良く鼻も高く、言葉も通じない。「これから何をされるのだろう…。」と、怯える日が続いた。

北方領土は、四方を海に囲まれた孤島。わずかな時間をともに過ごす中で、身振り手振りを工夫してコミュニケーションをとり、お菓子をもらったこともあったそうだ。ソ連兵に対する恐怖心は次第に薄れていったという。七十六年前、国籍は違うが、心が通う瞬間があった。その事実に私は衝撃を覚えた。奪ったものと奪われたものなのに、そんな感情が芽生えるものなのだろうかと。

「北方領土は島民だけのものではないのです。日本の固有の領土なのです。私たちの世代がいなくなってしまったら、誰が元島民の思いを、運動をつないでくれるのですか…。」

七十六年の月日が経ち、御年八十五歳になった少年は、私たちに声を震わせながらこのように伝えた。これほどまで思いの詰まった言葉を私は聞いたことがなかった。私はこの言葉を聞くまで、北方領土問題をどこか他人事で捉えていたのかもしれない。私の心で何かが揺れ動いた。

授業で、国後島や色丹島の元島民との交流事業に参加した先生方から、今の北方領土の様子を聞いた。現島民は、日本人をあたたかく歓迎し料理をふるまい、日本文化が好きな人も多くいたそうだ。中には、日本の教育を孫に受けさせたいと口にする方もいたという。ここでも私の中で、衝撃が走った。国と国との関係は複雑で、なかなか良い方向性に向かわないことも多い。でも人間と人間との関係は違う。お互いに心を開いて関わり合い、相手の思いに寄り添えば、分かり合えるのではないかと思った。

「元島民も現島民の方々も、どちらも幸せになる方法はあるのだろうか。」これが、授業で投げかけられたメッセージだった。元島民、現島民、お互いにとってふるさとである北方領土。悲しい歴史を繰り返さないために、私たち中学生には一体何ができるのだろうか…。仲間とともに真剣に考えた。

それは、光のように人の思いに「寄り添う」あたたかい心を持つこと。「自分事」として視点を変え、柔軟に物事を考えること。これが元島民の思いをつなぎ、現島民の居場所を保障する最初の一歩。対話を通して、相手の立場を考えてお互いが向き合い、思いを伝え合う。

“闇を闇で追い払うことはできないが、光だけはそれを可能にする。憎しみに憎しみを消し去ることはできない。愛だけがそれを可能にする“

お互いが必要なものを補い合う。どちらかの幸せを求めるのではなく歩み寄る。私たち中学生が発信し、思いをつなぐ。その先には、きっと明るい未来があると信じる。

優秀賞（京都新聞賞）

北方領土について私が考えたこと

京都市立下京中学校
一年　西村　柚菜

私は、北方領土について調べて自分が無知だったことを思い知った。北方領土がロシアによって占領されていることは知っていたが、それ以外のことは何も知らなかった。

日本がポツダム宣言を受諾して、降伏を表明した後からソ連が侵攻してきたこと、北方領土で暮らしていた日本人の島民を追い出して、法的根拠なく占拠を続けていること、これらのことを初めて知って驚いた。

歯舞群島多楽島の元住民である河田ハツさんの体験談が心に残っている。

「昭和二十二年九月六日の午後四時頃、突然、ソ連軍から帰国命令(強制送還)が出たんです。『明日、志発島に引き揚げ船が来るから馬を降ろし、一時間以内に身支度をしてこの船で志発島へ行け。もし遅れると一生、北海道には帰れない』と言われ、大急ぎで身支度をして船に乗りましたが、三十余年間も住み慣れた思い出多い故郷の島を離れることはとても辛いことでした。」

この体験談を読んで、私は故郷を離れることの辛さを痛感した。また、国後島泊村の元住人である村松弥志男さんはこのように語っている。

「日本の領土だったことに間違いはないのですから、まなじり決してでも返還してもらいたいです。私が住んでいて、先祖が汗を流してきた宝島なんですから。私は八十数歳になって、あと何年も生きられないですから、生きているうちに『父さん母さん島が返ってきたから、頑張った甲斐あったよ』と言いたいです。」

私は、何十年も北方領土の返還を待ち続けている村松さんの気持ちがどれほどのものなのかを思い知った。

ある記事によると、北方領土では墓参りで生花を持ち込むことすらできないという。墓参りに生花すら持ち込めないなんて、本来は日本の領土なのにおかしくないだろうか。

「北方領土はなぜ還ってこないのか」という本によると、これまでに返還のチャンスは何度かあったようだ。例えば、二〇〇一年三月には、プーチン大統領が、当時の総理大臣であった森喜朗氏に、「今は難しいが、自分がもう一期大統領をできれば、二期目に二島を返還できるよう全力を挙げたい」と語りかけたとある。

それにもかかわらず、いまだに北方領土が返還されていないのは非常に残念に思う。北方領土の返還は、これからも訴え続けていくしかないだろう。そのためには、私たちのような若い世代が関心を持ち、正しい知識を養っていくことが大切だ。

北方領土が返還され、好きな花を墓前に供えることのできる日が一日も早く来ることを私は願っている。

優秀賞（ＫＢＳ京都賞）

「不都合な真実」について

京都府立朱雀高等学校
三年　東郷　叶

私は、北方領土の一つである国後島について、ある映画をもとに考えを深めようと思う。八千人あまりが暮らしている国後島を舞台にしたドキュメンタリー映画、ベラルーシ出身のウラジミール・コズロフ監督が作成した映画「クナシリ」が描く、ロシアのメディアが報じてこなかった「不都合な真実」について考えていく。

かつて、北方領土には日本人約一万七千人が暮らしていた。しかし一九四五年、ソビエトは日ソ中立条約を一方的に破棄し、ソビエト軍が侵略し、多くの日本人が島を追われた。

「故郷から強制退去させられたというような追放は、世界史上非常にまれだ。」とコズロフ監督は言う。映画の中で監督は、日本時代の痕跡が今の島民の心に微妙な影を落としていることを描き出した。彼は開発の裏に潜む「負」の側面を次々と切り取っていく。島の一角に放置されたままになっている大量のゴミ。インタビューされた女性は、「島は発展している」という政府の主張に反論している。「トイレすらない状態で暮らしている。」と批判した。七十六年前から島で暮らす男性は、日本人が残した産業インフラや生活用品がいかに優れていたか覚えている。」と語る。また「我々は日本人から多くのモノを学び、引き継いだ。港や漁業を。」と語る者もいる。厳しい暮らしが続くうちに住民たちは日本など他国の支援に期待を寄せるようになっている。

映画のクライマックスには、毎年行われる「戦勝記念日」の様子を盛り込んでいる。政府が人々の愛国心に訴えることで不満をそらそうとしている様子を監督は描いた。「島ではソビエト時代のようにソビエト軍が勇敢に偉業を成し遂げたという神話が作られ続けている。」と監督は語っている。

この映画は、ほとんどのロシアの映画館で上映が拒否された。それはまさしくこの映画の内容が、ロシアにとって「不都合な真実」を表しているからだと私は思う。このような現象はロシアだけでなく、中国やアメリカ、日本をはじめ多くの国で存在している。政府やメディアの主導で人々は真実を取り違えているように思う。

映画「クナシリ」は、今年の四月にモスクワでようやく上映された。「今回の映画をきっかけにロシアの人も島の現実を知り、島の将来を巡る議論が前進することを願っている」と監督は話している。「私は親日や親ロシアの映画を作るつもりはなかった。島の暮らしを見せる映画が作りたかっただけ。明るい真実ではなく、都合の悪い真実を描いた。」という言葉は彼の心の叫びだと思う。

私がこの報道番組をテレビで観たのは偶然で、自分には直接関係ないと思って観ていた。映画は今年の冬、日本でも上映される。私の世代から見れば遠い過去の戦争の未解決な問題の一つであり、あまり身近に感じることができない。しかし、日本人もこの映画を観ることにより、低迷している北方領土問題に関する議論ができるかもしれない。そして人々の心に小さな変化が起こるとよいと思った。

優秀賞（ＫＢＳ京都賞）

若者と北方領土の未来

京都市立下京中学校
二年　立石　さくら

皆さんは、北方領土についてどのような考えをもっていますか。そして、北方領土に関心はありますか。私は、これまで北方領土に対してゼロに近いと言っていいほど考えてみたこともなかったし、関心も興味もありませんでした。この作文を手に取って読んでくださっている皆さんは、テレビの番組で北方領土のニュースが流れてきたときに、隅から隅まで全て観ることや聴くことはありますか。今は、関心をもって観る人は少ないように感じます。私も北方領土のニュースが流れてきたところで「観たい！」や「聴きたい！」と思ったことはないし、今もあまり思いません。そんなことより、芸能人のゴシップなどの方が、興味があります。そもそも最近の若者は、テレビでニュースを見ることなんてほぼありません。それでは、これからの未来を担う若者に北方領土について考えてもらうには、どのようにすれば良いのでしょうか。

私が最初に考えたことは、作文を書くことです。作文を書くためには情報が必要ですから、インターネットや本で北方領土について調べる必要があります。調べることは、関心や興味を引く一歩になります。また、作文を書く際、自分の考えや感想を考えることがあります。そのことでさらに関心や興味を深めることができます。ただし、書いて終わりでは私はダメだと思います。今は、多様性が尊重される時代だけに、自分の意見を留めておくことは、とてももったいないことだと思います。もし、たくさんの人と北方領土について考えたことを交流すれば、より北方領土への考えや関心が深まるはずです。さらに、この交流を京都から日本、日本から世界へ広げれば、北方領土について知ってもらったり、ロシアの方たちの考えていることを知ることができたりするので、北方領土問題の解決にも近づくはずです。

次に考えたことは、北方領土の問題を小学生の時から継続して学習することです。小学校では北方領土について考えることは、年に一、二回あるかないかでした。それは、中学校でもあまり変わりません。そのため、私が北方領土について今知っていることは、「ロシアと日本の領土問題」や「ソ連の人が占拠した」などの薄い知識ばかりです。私は、小さい頃から北方領土について学ぶことが大切だと考えました。

最後に私が考えたことは、スマートフォンの活用です。今の若者の大半の人がスマートフォンを持っています。私も今回、スマートフォンで北方領土について調べました。スマートフォンは、ワンクリックすれば多くの情報が出てきます。それを生かせば、若者にも北方領土について関心をもってもらえると思います。例えば、私たちと近い年齢の方が北方領土について情報をまとめたり、考えをブログに書けたりすれば色々な人が見て北方領土について知ることができます。今回、私が使用したサイトは難しいものばかりでした。私たちと同世代の有名な人たちが北方領土について書くことで、若者も興味や関心をもってくれるのではないかと思います。

今回の作文を書いてみて感じたことは、若者は北方領土について考え、意見を発表することが少ないということです。私は、これからの日本を担う若者が北方領土について、もっと知ってもらえるような活動に関わっていきたいです。

佳作

島民の声を多くの人に伝えよう

京都府立福知山高等学校附属中学校
二年　佐伯　妙子

私は学校で「ジョバンニの島」を観るまで、北方領土問題について深く知ることはありませんでした。日本人がこんなひどい目にあっていたことさえ知りませんでした。だから私はこの映画を観てから、北方領土問題について本やインターネットでいろいろ調べてみました。

そこで私が受けた印象は、北方領土問題とは、土地がどちらの国に属するか問うことよりも、そこで生活していた人々、そして侵入せざるを得なかったソ連軍の人々の苦しまなければならなかった現実こそが大きな問題であると感じました。

この映画の中でもそう感じさせる場面がありました。主人公の淳平の父、辰夫がソ連軍に連れていかれる姿を見て、淳平が必死に追いかけるところです。ようやく終戦を迎え、日常を取り戻せると思っていたところに、島に侵入してきて食料強奪、住居や行動が制限された生活の中で、透き通った心を持っている淳平と幹太はソ連兵の娘ターニャと仲良くなり、淳平とターニャは次第にひかれあう仲になっていきましたが、この出来事をきっかけにその関係が崩れてしまったのです。自分の父親が、思いを寄せる人の父親に連れて行かれる事実を目の当たりにし、それまで信じていた人を疑ってしまう状況で生活していました。それはお互いに不幸な境遇だったとしか言いようがありません。そんな状況に国民を置いた日本とロシアの両国に憤りを感じました。

もう一つ私が衝撃を受けた場面は、島民が無理やり樺太へ向かわされた後の生活です。人間として扱われているとは到底思えないとても大変な事だったことが分かりました。日本に帰れると期待して船に乗った人々が、樺太で降ろされ、ソ連軍の言う通りにしなければならなかった現実は、とても苦痛で辛いものだったと思います。そして人々は日本に帰ることだけを希望に生き抜いていたことが分かりました。

六十年後、島へ上陸できた元島民の人々の声が、北方領土問題対策協会のホームページで公開されていました。「島に上陸した印象は、言葉では言い尽くせない懐かしさがあった。島を散策すると一つの石、一本の草、一本の昆布が懐かしい。触ってみて、味わってみて、六十年過ぎても子どものころと同じだ。」この言葉こそ、北方領土問題によって人生を狂わされた人々の本音だと思いました。つまり、あの島を離れた日から自分たちの人生は止まったまま…そして六十年後に島へ戻った時から、人生の時計が再び動き始めたのでしょう。しかし、それは一部の人たちだけ。それまでに命を落としてしまった人々が多くいることを私たちは忘れてはいけないと思います。

最後に、北方領土問題について私たちができることは何か。まず、いろいろな立場の人の話を聞くこと。そして、その声を多くの人に伝えることです。その後、いつか北方領土が日本に返還された際に、同じような悲劇が繰り返されるのを回避できる世の中にしていくことだと思います。

佳作

お互いの気持ちを

南丹市立八木中学校
二年　松本　明寿香

二年生の授業で北方領土問題について学びました。

北方領土は択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四島から成り立っており、水産資源がとても豊かで自然も残されている美しい島です。

しかし、日本の領土にもかかわらず、一九四五年以降、ロシアに不法に占拠されたままだということに驚きました。

戦前、四島で暮らされていた日本人が、約一万七千人おられましたが、戦後七十六年が経ち、そのうち一万千人以上の方がなくなられてしまいました。強制的に追い出されてから自分の故郷に帰ることもなくとても悲しい思いをされたのだと思うと心が痛みます。

残された島民の方も現在約八十五歳と高齢になられており、生きているうちに故郷に戻りたいという強い思いを持っておられます。

戦後七十六年の間、北方領土問題が解決されないまま、現在の北方四島にはロシア人約一万八千人が暮らされています。豊かな自然に加え、最近では水産物を加工する工場、空港、観光施設などが建てられており、ロシア人にとっても北方四島は自分達の故郷となっています。七十年以上が経っているから、そこで生まれ育ち、学校に通う私たちと同じような中学生もいます。

日本人、ロシア人にとって北方領土は「大切なふるさと」なのです。しかし、日本人でかつて北方四島で暮らしていた人は少なくなっています。なので、次の世代が歴史や思いなどを受け継いで行く必要があります。お互いの「故郷」なのだから、争うことなくお互いが住めるようにしていければよいと思います。日本人、ロシア人という区別なくお互いの文化を学び合い、また共有していくことが大切です。この島を愛し、暮らしていくという思いがあれば、お互いを認め合うことができるはずです。

今年の夏に行われた「東京オリンピック・パラリンピック」でもそういう場面が見られました。今大会から始めて競技種目に採用されたスケートボードで、演技や技が成功すれば他の選手たちも拍手を送り、失敗すれば我がことのように悔しがられていました。勝ち負けよりも「好きなことを楽しんで競技に臨む」という部分が大事にされていました。だから相手のことを自分のことのように受け止めることができるのだと思います。

このような考え方が、社会全体にも広がればいいと思います。北方領土は歴史的な問題が多いけれど、一人一人が意識して北方領土問題を忘れてしまわないことが必要です。お互いが歩み寄り、お互いが北方四島をすてきな故郷としてどう残していくか、今の時代を生きる私たちにしかできないことがあるはずです。身近なことから取り組んでいきたいと思いました。

佳作

北方領土と私たちの付き合い方

京都府立海洋高等学校
二年　松本　若菜

「北方領土」、その単語を聞いて連想されることは人それぞれである。「日本の領地だろ」、そんな考えの人もいれば、「もうロシアのものじゃないのか」、「まだどちらかなんて決まっていないだろう」、まさに十人十色といってよいのではないか。そんな北方領土についてこの機会に考えてみたい。

そもそも「北方領土って何？」から入る人も少なからずいるだろう。北方領土は、北海道の根室半島の沖合に存在する択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島からなる島々である。そんな北方領土は第二次世界大戦以降、ソ連（ロシア）に不法占拠されたままになっている。そのため日本は返還を要求し続けている。返還されることを願った元島民の方や北海道の高校生は、北方領土返還に関する政府要求を行ったり、強化月間を設けて北方領土について考えるきっかけとなるような取組を行ったりしている。このような取組を行っているにもかかわらず、問題に進展がないのは、日本の現状に原因があると私は考える。

それは取組に対しての認知度だ。この取組について詳しく知っている人はどれだけいるだろう。そもそもこの取組が行われていること自体知らない人が大半を占めているのではないだろうか。つまり国民の認知度が低いのだ。例えば、二人の実演販売士が同じスーパーで同じ商品を実演販売したいと申し出たとする。Aさんはその商品の魅力を最大限に引き出そうとするために、他の実演販売士の実演販売から学んだり、商品の情報を頭に入れて実演販売に臨もうとしていたとする。一方、Bさんは周りから情報収集を行うことなく、商品に対する知識は全くない。あなたがそのスーパーの店長だったらどちらに実演販売を依頼するだろう。おそらくAさんを選ぶ人が大半だろう。私だってそうする。理由は明快だ。知らないことを一生懸命伝えようとされるより、予備知識がある上に、伝え方について学んできた人に伝えてもらいたい。

よってこの例を北方領土問題に置き換えて考えてみるとしよう。国民の中にも北方領土問題に対しての関心がほとんどないなかで要求を出す。日本国民が北方領土に関する関心を持ち、国民全体でロシアに対して要求を出す。皆が望んでいない要求をロシア側は受け入れたいと思うだろうか。いや、そうは思わないだろう。

北方領土の問題は長い間懸案事項となってきた。教科書に掲載されていて現代の子どもたちには、大人になるまでに必ず一度は触れる機会がある。「そうなんだ」と感じることも大切だが、これを機会に少しでも関心を持ち、返還について考える機会とすれば、北方領土が日本に返還される日も遠くない未来に訪れるのではないだろうか。

佳作

北方領土問題について

宮津市立宮津中学校
二年　岡本　優莉奈

北方領土問題について知っていることは、日本のものである四島が不法にロシアによって占領されているということ、という人が多いのではないかと思う。かくいう私も今まで授業で教えてもらったことぐらいしか知らなかった。いや、知ろうと思わなかったのが本音である。そんな私が授業や自分で調べたりして出した解決に近づく方法は二つである。

まず一つ目は、北方領土問題を知ることだと思う。はじめに書いたように、北方領土問題のことを詳しく知っていたり、興味を持っている人はそう多くいないだろう。なので、北方領土問題の本や紙芝居、ポスターなどを作り、それを全国の小・中学校、高校や幼稚園・保育園にそれぞれの年齢に合わせて置いておけばいいのではないかと考えた。例えば、小学校の低学年の子には絵本を、保育園や幼稚園の子には紙芝居を北方領土問題について考える日として、読み聞かせをしたらいいのではないかと思う。また、小学校の高学年や中学生は、どうすればよいのか意見を交流したりして、そこで出た一番良い案を集め、さらにその中で良いと思う案を決めて今後の参考にしたり、実施できそうな案は実施すればいいのではないかと思う。何か考えるきっかけをつくり、少しでも多くこの問題に目を向ける人、興味を持つ人が増えれば解決への大きな一歩になると考える。

二つ目は、返還の方法についてである。私は二島先行返還を支持する。理由は、先に約束した二島を返還していただいて、後から残りの二島を返還してもらえばよいと考えるからである。また、戦争の時のように自分のふるさとをなくしたり、強制退去させられる人のないよう注意を払うべきだと考える。そのためにロシアとの話し合いを続けていくべきだと考える。例えば、今、住んでいる人たちはロシアの国籍のまま住めるようにしたり、ビザなしで来ることができるようにするなど、できる限り今まで住んでいた人を尊重していくなどである。今、住んでいる人と強制退去させられた日本の人が、同じふるさとで幸せに平和に互いを尊重し合って過ごすことができるようになっていくためにも、二島返還を早急に進めていくべきだと考える。

私はこの作文を書くにあたり、北方領土についていろいろなことを知り、考えることができた。私のように何かのきっかけで北方領土問題を考える人が増え、今、住んでいる人と強制退去させられた日本人が同じふるさとで平和にお互いを尊重し合える、そんな素晴らしい未来を目指した解決が行われることを願う。

佳作

北方領土返還の在り方

綾部市立八田中学校
二年　山室　みなみ

「北方領土問題」、このあまり馴染みのない問題について、漠然としか知らなかった私は、北方領土問題の歴史について調べてみた。

第二次世界大戦末期、敗色濃厚だった日本はポツダム宣言を受諾した。しかし、その後すぐにソ連は北方四島をすべて占領し、住んでいた日本人は強制退去させられた。それ以降、残念なことに今日にいたるまでソ連、ロシアによる不法な占拠が続いている。

次に私は、なぜ北方領土問題が解決しないのかを考えてみた。一つは北方領土の自然にあると思う。北方領土の島々にはたくさんの動物がすんでいるほか、国後島、択捉島は森林資源に恵まれている。また周辺の海は世界三大漁場の一つに数えられ、豊かな海洋資源の宝庫だ。そんな四島を領土にしたら国の大きな利益になるので、この四島を領土にしたいという両国の考えは当然だと思う。

二つ目の理由は、相互理解がまだ足りていないからだと思う。「奪われたから奪い返す」という考えではなく、日ロ両国民が北方領土について正しい認識と理解を深めることが大切になっていくと思う。

この二つの問題が解決されれば、まだ平行線をたどっている状況が大きく前進すると思った。

しかし私は、今のままでは北方領土返還は難しいと考える。だから私は双方にメリットがある「共存」「共生」等の折衷案を提案する。北方領土の一部を日本とロシアの共同統治領にすることで両国とも漁業範囲が広がり、両国の政治で北方領土が発展するだけでなく、日本もロシアも豊かになると思った。

しかし、この案はあくまで最終手段として使われるべきだと考える。かつて住んでいた日本人が、今住んでいるロシア人がこの四島を大切にしている気持ちは同じなので、できるだけ早く北方領土を求めている人のもとにあった方がよいからだ。この平行線の対立に終止符を打つには、この方法が一番早く有効だと思っている。

しかし、多くの人は北方領土全域の返還を望んでいるだろう。北方領土が外国の領土になったことは一度もない。だから日本側はもっと強く返還を主張していくべきだ。現在、元島民の方の平均年齢は約八十五歳で返還運動に参加している人も高齢化が進んでいると聞いた。

そこで、私は直接活動に参加するのが難しい私たちでもできることを考えた。それは自分に今、住める場所があって楽しく過ごせる自分が享受して当然と思っている幸せが、突如として奪われてしまった歴史があることを知るのが大切だと思う。

日本もロシアも納得した解決は、まだ先の未来になるかもしれない。しかし、私たち若い世代が北方領土問題を取り上げ、風化させず返還への声を絶やさなければ、停滞している問題も平和的な解決に向かっていくだろう。

佳作

北方領土問題解決に向けて

京都市立東山泉小中学校
九年　酒井　美羽朱

北方領土とは、北海道の北東部に位置する択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島々のことです。これらが現在、ロシア連邦に占領され続けていることが問題となっています。

第二次世界大戦の末期に日本にポツダム宣言が発された後、ロシアに北方領土のすべてを占領されました。これにより、以前北方領土に住んでいた日本人は強制退去させられました。

なぜこのように、日本の領土を奪おうとするのでしょうか。

私はこの理由として、領土が島国であることが関係しているのではないかと思います。どこの領地でも手に入れて自国が拡大したら嬉しいと思います。ですが、島国だと陸の資源だけではなく、水産資源も多く得られます。周りが海に囲まれており、排他的経済水域も広がるため、北方領土をロシアは欲しがるのだと思いました。

占領が始まってからずっと、今もロシアが占拠していますが、この領土問題は少しでも早く解決されるべきです。それなのになぜまだ占領が続いているのでしょうか。

昔のように対立している国どうしが武力で勝敗を決めるのであれば、もうすでに領土問題の話はなくなっていると思います。しかし、領土が日本のものであることや、二度と戦争を起こさないということから、両国とも話し合いで解決しようとしています。ロシアが日本に返還することを認めない限り、話し合いは終わりません。日本はロシア政府との間で強い意思をもって交渉を行っています。例えば、「北方領土の日本への帰属が確認されるのであれば、実際の返還の時期及び態様については柔軟に対応する。」「北方領土に現在居住しているロシア人住民については、その人権、利権及び希望は、北方領土返還後も十分尊重していく。」などです。こういった意思をロシアが同意するのに時間がかかっているため、なかなか解決されないのです。

領土問題が解決すれば、もともと北方領土に住んでいた住民が故郷に戻ることができます。また、北方領土問題によって途絶えていた、戦後の日露間の平和条約も締結させることができます。最近の菅総理とプーチン大統領の会談では、「一九五六年宣言を基礎として平和条約交渉を加速させる」ことで合意し、平和条約がむすばれると同時に北方領土が返還されることになっています。

北方領土は、今まで一度も外国に占領されたことがなかった領地です。できるだけ早く問題が解決され、日本とロシアが対等な関係になってほしいです。

佳作

幻の故郷　～一度でいいから帰りたい～

京都市立大原野中学校
三年　馬場　菫花

新聞を読んでいても、テレビのニュースを眺めていても、新型コロナウィルスの話題ばかりだ。北方領土の問題は、今日日あまり聞かない。そんな事を考えながら、昨日配られた北方領土に関する作文コンクールの実施要項に目を通す。授業では領土問題について教わったが、作文となると難しい。そもそも北方領土が占領されて困ることなんて、あまりないのではないか。現に、国民が困っているようには見えない。困っていたとしても、何に対して困っているのだろう、と不思議に思う。そんな考えの私は、作文を通して北方領土のことを知ることになる。そして考えが一変する。

北方領土のことは詳しくないので、知りたいことはインターネットで調べた。すると、次々に北方領土について書かれた記事が出てくる。参考にするには多いくらいの記事から、まず北方領土の歴史の記事を選び、一つずつ丁寧に読んでいく。北方領土をあまり知らないという私でも、北方領土がロシアに占領されているというのはさすがに知っていた。なぜロシアなのか。その答えは一九四五年の終戦の年にあった。日本がポツダム宣言を受諾した後、ソ連軍（第二極東軍）が進撃。北方領土は不当に占拠された。私は、この事実が何を指しているかはっきりと分かった。

約七十年間という長い間、ずっと占拠されていたのだ。日本は夙にこの問題に取り組んだわけではない。日ソ共同声明の時、つまり一九九一年に平和条約において解決すべき領土問題の対象になった時からだ。占領されてから約四十五年後にやっと対策がとられたわけだが、遅すぎではないかと思う。結果、今もまだ解決できていない。

占領された時についてさらに詳しく調べた。日本人は追い出され、故郷に帰れない人達がたくさん出てきた。北方領土で産まれ育った日本人は、現在約八十歳を超える年だそうだ。

私は思った。調べる前は、国民が困ることなんてないと考えていた。だが、故郷に帰れない、住めないということは深刻な問題だ。「困る」というと少し違うが、きっと北方領土が故郷の人は寂しさを感じているのではないか。私がその立場にいたとしよう。私は自分の故郷が好きだし、大人になっても訪れるだろう。そんな故郷を占領されたら、あなたはどう思うのだろうか。故郷に一度でいいから訪れたい、あの景色をもう一度見たい。そんな想いが、強く強く表れるはずだ。

人々は色々な想いで北方領土を返してほしいと思っている。一人一人の思いは少し異なるが、根本的なものは同じだ。その想いが一つになって、人々は返還運動を続けている。

北方領土が故郷で、返還運動を続けている人々のためにも北方領土を返してほしい。日本とロシアの間にある領土問題。解決することを願い、北方領土を知ってほしい。

佳作

北方領土について

京都市立洛南中学校
三年　松岡　珠蘭

ニュースなどでよく北方領土問題について多く取り上げられていますが、私は北方領土についてくわしく知りません。そこで、なぜ北方領土がロシアによって占拠されているのか調べました。

日本はロシアより早く北方四島の存在を知り、多くの日本人がこの地域に渡航するにつけて、徐々に島々の統治が進んでいきました。それ以前も、ロシアの勢力がウルップ島より南にまで及んだことは一度もありませんでした。しかし、第二次世界大戦末期の一九四五年八月九日、ソ連は当時まだ有効であった日ソ中立条約に違反して対日参戦し、同年八月二十八日から九月五日までの間に北方四島のすべてを占領しました。当時、北方四島にはロシア人は一人も住んでおらず、日本人が四島全体で約一万七千人住んでいました。ロシアは一九四六年に北方四島を一方的に自国領に「編入」し、一九四八年までに全ての日本人を強制退去させました。それ以降、今日に至るまでロシアによる不法占領が続いています。このような北方領土問題が存在するため、日露関係は戦後八十年がたったにも関わらず、いまだ平和条約が締結されていません。

次に私は島の人達がどのような生活をしていたのか調べました。歯舞群島では面積が小さいながらもたくさんの人々が生活していたそうです。そこでは、五、六メートルの昆布を採って暮らしていました。他の島でも漁を中心に生活していたそうです。毎日同じおかずでも、わがままや不満はなかったそうです。戦争に勝ったロシアは不法に北方四島を占拠しました。無抵抗の人々を銃で脅し、家を荒らしたそうです。それに耐えきれず、島を脱出する人もいたそうです。その後、兵隊が上陸し、島民の方は強制送還させられました。乗り込んだ船は貨物船で毎日パンと漬物が出されたそうです。栄養失調で亡くなられた方もいました。赤ん坊ですら死んでしまえば海に捨てられてしまったそうです。北方四島には日本人のお墓もあります。それらを突如として奪われた悲しみは、住んでいた人たちにしかわかりません。だから私のように北方領土についてよく知らない人たちのためにも、このような話はもっと語り継いでいくべきだと思います。

自分には関係ないと思わず、日本の領土が不法に占拠され、辛く悲しい思いを経験し、今も返還を目指して活動している人がいることを、同じ日本国民として知ってほしいと思います。

佳　作

大きなムーブメントは情勢を変える力に！

京都市立嵯峨中学校
二年　安藤　壮太

北方領土問題は、戦後七十年以上がたっても解決されていない、未解決の国家間問題です。戦後に当時のソ連が不法占拠し、それが現在まで続いています。現在のロシアは強硬姿勢を崩さず、日本としては、国家の強い意志がまだ目にみえるほどには届いていません。その原因は、私たち国民にもあると思います。

日本という国は、民主主義国家という言い方で表現されます。政治家は、私たち国民に選ばれていることを何より強みにしているので、国民が北方領土問題への関心を示さない限り、関心のない政治家は動きません。与党の政治家には、「北方領土問題を解決しないと政権運営が危ない。」野党の政治家には、「領土問題で具体的な解決策を見出すことができれば政権を奪取できる。」と思わせるぐらいのムーブメントが必要だと思います。

国民に選ばれたとても優秀な方たちで、人生経験も豊富なので、私たちにはない考えを実際に生かすためにも、国民の意識の高まりには、問題解決には必要不可欠だと思います。

国民の意識を高めるためには、メディアがこの問題について積極的に取り上げることや、他の領土問題も含めて定期的に問題について解説するコーナーが必要だと思います。わざわざ検索することなく、待っていても情報が入ってくるぐらいの環境づくりが、この場合は大事だと感じます。

また、二月七日の「北方領土の日」に合わせて政府が何らかの発信をしたり、それ以前に、あまり知られていない「北方領土の日」を広めたりすることだけでも、国民の関心の高まり、知識の深まりは起きるのではないかと思います。

ムーブメントを起こす大きな力を持った若者に語りかけるのなら、インフルエンサーに協力を呼びかけたり、外務省などがツイッターを、もっと活用して情報を発信することも効果はあると考えます。

北方領土問題は、日本国にとって、とても重要な対外問題の一つです。解決に向かうには、私たち国民の理解や関心が不可欠です。これからの社会を動かしていく若い人たちを巻き込んだ、大きなムーブメントが政府を動かす大きな力になることは間違いありません。北方領土問題について家や学校で話し合うことや、メディアが取り上げることが普通に受け入れられるくらいの関心が集まる社会が構築されることが理想だと感じました。そんな社会を目指す一員として、日々この問題について考え、自ら行動していきたいと思います。

佳作

北方領土の問題について

京都市立下京中学校
一年　金子　莉衣沙

北方領土について、私は、最初、その名前しか知りませんでした。そのため、まず北方領土について書かれた本を読みました。本を読んだり、外務省のホームページなどから情報を入手して、日露通商条約で確認された国境のこと、日本が不在の中で結ばれたヤルタ協定のこと、日本とロシアとの間で何度も交渉が行われていたことを知りました。交渉は、島のことだけではなく、お互いの国の政治や経済の状態も関係するので、なかなか思うようには進まなかったと思います。

そして、今現在、北方領土の島で暮らす人々がいることについて考えました。

私だったら、不安で落ち着かないと思います。歴史的な流れを見れば、北方領土は日本の領土であると思います。そのため、二島返還ではなく、四島すべての返還を望むのはもっともなことだと思います。

けれども、ロシアには、ロシアなりの意見があるのでしょう。

私が一番悲しく思うのは、国と国とが対立すること、人々の気持ちが対立してしまうことです。ロシアの人も、私たちと同じように、穏やかに生活したいと思う気持ちをもっているはずです。今、北方領土で暮らす人たちにも、学校に行ったり買い物をしたり、趣味を楽しんだりする普通の生活があります。

読んだ本には、現在の北方領土で暮らす島民の生活が紹介されていました。島民の中には、日本のアニメや文化に興味をもっていて、日本に対して好意的な人もいるが、そのことを言いにくいのだといいます。

一方で、島に戻りたいと願いながら、帰ることのできない元島民の方がいます。元島民の方の「生きている間に解決の道筋をつけてほしい。もう残された時間はない」と語る言葉に、とても辛い気持ちになりました。

この問題は、みんなが犠牲者なのだと感じました。国境は目に見えるものではなく、人間が決めたものなので、解決するのも人間であるはずです。根気よく話し合い、良い解決法を考えてほしいと思っています。

中学生の私では、まだ、このような国際的な問題を直接相手と交渉して解決することはできないと思いますが、この問題について「知る」ということはできます。

私は、これまで、言葉としてでしか北方領土について知らなかったです。北方領土の名前を覚えるだけではなく、どんなことが起きていて、今、どうなっているのか、日本の立場やロシアの立場を「知る」ことが必要です。無関心でいることが一番良くないです。自分の国のことなのだから、しっかりと学んで考えるべきだと思います。

国民のみんなが関心を持ち、北方領土のことを知ることで、一日も早く解決の日が来てほしいと思います。

第16回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞作文集

令和4年（2022年）2月5日発行

編集・発行　北方領土返還要求京都府民会議
〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府広報課内

京都府北方領土教育者会議
〒629-1116 京都府船井郡京丹波町市場丸ヶ野4
京丹波町立和知中学校内

印　　刷　株式会社　田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入
石不動之町677-2